
義父の品格

L e n

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

義父の品格

【Nコード】

N7786R

【作者名】

Len

【あらすじ】

いつも通りの薫×雪路。二人がだいたい小学生高学年あたり。雪路とヒナギクの義父を、私の予想でオリジナル設定として組み込んでいます。苦手な方はご注意ください。

自分で自分のことをロリータコンプレックスと自覚しているのは、果たして無自覚でいるのとどちらが厄介で犯罪的なのだろうか。ぼくは前者に属するロリータコンプレックスで、職業は小学校教諭だ。……この時点で大多数の人間が然るべき機関へ通報するだろうが、それは性急というものだ。しかしここでロリータコンプレックスがいかなる精神の在り方なのかを語っても、性犯罪者の言い訳にしか聞こえないのでそれは止めておく。

今回語りたいのは、窓の外で元気に走り回っている女の子についてだ。名前は雪路、友達からは「ゆつきー」や「ゆきちゃん」と呼ばれている。昼休みには校庭へ我先にと向かい、ケイドロやかくれおに等に精を出している天真爛漫な子だ。ぼくはこの子のクラスの担任だった。これはある放課後の話だ。

授業が終わり、校庭でまだ遊んでいる生徒もはけてきた頃、施錠の為教室に戻ってみると、まだ電気が点いており生徒が残っている様子だった。話し声も聞こえる。ぼくは早く帰りなさいと注意しようとしてドアを開けようとしたのだが、その時ドアの窓から中の様子が見えてしまったのだ。雪路と、雪路に惹かれているのが見え見えの薫くんが。薫くんは、この年代では珍しくないが、好きな子にちょっかいをかけたくなるタイプの子で、雪路といつも組み合いのケンカをしている。まあだいたい雪路が勝つのだが。そんな子たちが放課後の教室（夕日が室内を照らしていて、雰囲気が出ている）に二人つきり、ということとは……。ぼくは余計な想像を切り捨てた。んー、薫くんもついに自分に素直になる時が来たか。こうやって子供は成長していくんだなあ。こくこくと頷きながら、生徒の躍進に純粹に感動していた。ぼくもここで早く帰れなんて野暮なことは言わないさ。分かってるつもりだ、薫くん。だけど君の勇姿をこの

目に刻み込む為に、ここで見守っているよ！（この間わずか0.2秒）

さあ、夕日の所為なのかそれともまた別の要因なのか、顔を真っ赤に染めた薫くんが口を開いた。それに応えるように雪路も何か言っている。……しかしよく聞こえない。君たちいつもはもつと大きい声で話してるじゃないか、授業中でもお構いなしに。こういう時にだけ小声で話すなんて不平等だ、今度道德の授業で平等について詳しくやらければな。取り敢えず、手振り身振りと唇の動きから読み取れることだけを頼りに、ぼくがアテレコして現地の様子をお伝えしよう。

『で、話って何、キョウくん。あたし、早く帰ってお店の手伝いしなきゃいけないんだけど』

『わ、悪いな。そ、その……どうしてもお前に言いたいことがあって……』

『言いたいこと？ ていうか、どうしたの、なんかキョウくん顔赤いよ？ いつもとなんか違うし……』

『あ、赤くねーよ！ 夕日だよ夕日！ ってそうじゃねえ……お、オレが言いたいの……っ！』

『え、ちよっ、ち、近いよキョウくん……っ』

『雪路！ おおお、オレはお前が……すっ、好きだ！』

『ズキユーン そ、そんな……あ、あたしもキョウくんが、好き！』

『そ、そうか！ じゃあ一緒に踊ろう雪路！』

『うん、キョウくん！』

「そして二人は手を取り合い、朝になるまで踊り明かしました」

「ああ、てつきり不審者だと思ったら桂先生でしたか。しかし教室の前で何やらぶつぶつと呟いてる様子は、いくら教職員といえど不審者の部類に十分入るのではないかと私は思うのですが、貴方はど

「うお考えですか」

突然後ろから情け容赦の無いツツコミが降ってきて、思わずぼくは振り返る。しかし振り返らなくても、後ろにだれがいるかは分かっていた。

「君か……驚かせないでくれ、そして今良いところだから邪魔しないでくれ」

「教師が覗きとは……品格が疑われるので止めて下さい。もっとも、貴方には疑われる品格すら持ち合わせていないようですが」

「あつはっはー。いくらタフなぼくでも、そんなに容赦無いと傷付くんだぞ」

「黙れペド野郎」

この視線だけで人が殺せそうな眼力の持ち主は、ぼくと同僚の教師だ。この態度はぼくにだけで、他の教員に対してはとも人当りが良く生徒や保護者からの評判も良いという、なんとも理不尽な人だ。

「一体中に誰がいるんですか？」

「中に誰もいませんよ」

「は？」

「いや、なんでも無い。中にいるのは雪路と薫くんだよ」

それだけ言うと、ぼくはまたドアに向き直った。どうやら教室内はぼくがアテレコした内容とはかけ離れていたようで、二人は特別変わった様子は無かった。一体何を話しているのだろうか。

「何をしてるかと思えば……本当に救いようのない性倒錯者ですね、貴方は」

「いやあ、だって、気になるじゃないか。君だって自分の好きな人が他の人に告白されるシュチュエーションに遭遇したら、思わずこうやって様子を窺いたくなるだろう」

「例えがおかしいです。それでは貴方は小学生に劣情を催している、真性のペド野郎ということになるのでは」

「劣情だなんて。ぼくが彼女に対して抱いているこの感情は、決し

て卑しいものではない。愛いものを愛でる、純真無垢な精神だ」

「……貴方が手遅れだということが十二分に理解出来ました」

あれ、おかしいな。どうやらぼくと同僚の間には、是正しなければならぬ認識の相違があるようだ。

「通報されたくなければ、速やかに職員室に戻りましょう。さ、行きますよ」

「あ、ちよつと待ってくれ。まだ会話の内容を把握してなくてだね」
「それこそお得意の性倒錯的な妄想でカバーして下さい」

「お、おいおい引つ張らないでくれ。ていうか君、なにか怒っていないか？ あいたたたた、爪が食い込んでいるのだけれど！？ ちよ、ごめんなさいすいませんもうしませんから許して下さい」

そのまま職員室に連れ戻され、同僚に教員の在り方についてこつてりと説教された。ぼくは何を間違えたのだろうか。

「話ってなあに？ キョウくん」

「なあ、お前最近、桂先生に変なことされてないか？」

「ヘンなこと？」

「たとえば……か、からださわられたりとか」

「えええ？ やだもう、キョウくんのえっちー」

「おまつ、オレはお前のことを心配してだな！」

「大丈夫だよ。先生、いつもやさしいし」

「そ、そうか……ならいいんだけどよ」

「ありがとね、キョウくん。心配してくれて」

「へっ！？ い、いや！ 別にお前のことなんか心配してねーし！」

「えー？ だつてさつき自分で言ったじゃん」

「あ、あれはなんていうかそのえつと」

「キョウくん顔赤いよ？」

「あかつ赤くねーよ！ これはそのつ、夕日のせいだよー！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7786r/>

義父の品格

2011年3月20日22時25分発行